

Le Clos de la Bruyere

ル・クロ・ド・ラ・ブリュイエール

地区、村 : Soings en Sologne ソローニュ

オーナー : Julien Courtois ジュリアン・クルトワ

HP : <http://www.juliencourtois.com/>



創業年 : 1998 年

ドメーヌ解説 :

ジュリアンはクルトワ家に 1978 年に 3 男として生まれ、幼いうちから家族みんなで動物の世話をし、畑仕事や収穫などを手伝ってきました。ジュリアンも、父クロードの仕事を手伝いながらワイン造りを学び、20 歳のときに《ル・クロ・ド・ラ・ブリュイエール》として独立します。家を離れたのは、早い時期でしたが、父のワイナリーであるカイユー・デュ・バラディから 5km ほどのところに、自宅とセラーを自分で建てました。

ワイン名はシンプルに。Résonance : 共振、共鳴、Autochtone : 先住の、大地からの、Originel : 起源、Esquiss' : 下絵、草稿、Ancestral : 先祖から受け継いできた、Elements : 要素、元素。ジュリアンがとても思慮深く、彼自身の大事にしているものがよくわかるネーミングです。

少し昔の話になりますが、ジュリアンの畑は 2001 年、遅霜と収穫前の局地的な雹にみまわれ、収穫の 8 割を失いました。もともと周辺の造り手の 1/4 にも満たないほど収量 (hl/ha) を抑えていたのですが、その貴重なブドウの大方が失われたのです。一年間の苦労の結果がわずかな収穫となったのですから、ジュリアンの落胆ぶりは大変なものでした。この畑では通常、ムニユ・ピノというロワール在来種から、オリジナル、エスキス、フラン・ド・ピエ、アルバの 4 種類の畑違いのキュヴェを造っていました。が、この年はあまりに収穫が少なくて畑別に醸造できないため、すべてを混ぜて醸造せざるをえませんでした。天から無常にたたきつける雹の打撃を受け、たった 2 樽に減ってしまったワインに、ジュリアンはユーモアをまじえて「コレール・ド・ゼース (ゼウスの怒り)」と名づけました。2003 年 2 月に樽からテイスイングしたときは濃厚なジュースといった感じでしたので、2001 年ヴィンテージは仕入れを見送ろうかとすら思っていました。けれども、その後 6 月にボトルから味わったときは、すばらしい凝縮感のある生きいきとした味わいで、すっかりワインとしてのまとまりがでていました。

このようなワインと歩んできたからこそ、現在のラシーヌだと、常々感じていますが、近年 (例えば 2015 年以降) のジュリアンのワインは内側から湧きあがるようなエネルギーを感じます。荒々しさの残るままリリースされていたころを懐かしくも思いますが、余計な装飾の無いピュアな味わいは、品種とその土地の味わいが素直に表現されています。

2020 年にはコレール・ド・ゼースを彷彿とさせるような、リバション (VT03~05 のブレンド) がリリースされ、荒々しかった要素がまとまったからこそその美しさが出ており、焦らずに売らず、時間をかけてご案内いきたいです。